

<学会参加記I>

国際学会参加記

遠藤環

2004年5月17-18日に、アジア工科大学(AIT:バンコク)で開催された“Gender, Development and Public Policy in an Era of Globalization”という国際会議に参加し、報告する機会を得た。この国際会議は、3つの大学による実施委員会(および報告申し込みに対する査読)によって企画・運営されていた。会場となったAITのGender and Development Studies、オランダのInstitute of Social Studies、イギリスのリード大学のInter-Disciplinary Gender Studiesである。また、4つあるそれぞれのパネルの主査を務めたのは多彩な国籍の研究者であり、日本からは東京大学の大沢真理先生が名を連ねていた。「グローバル化」と「ジェンダー」という二つの大きなテーマに対して、研究者、実務家、運動家のそれぞれの立場から、実態のみならず、「政策」に対する具体的示唆を持つ報告まで、非常に刺激的な内容の多い会議であった。

「開発と発展」の領域のもとで、主題テーマを様々な角度から議論していくために、パネルは4つのサブテーマに分けられていた。

1. Gender, conflict migration and human security
2. Gender, human right and social policy
3. Gender, economic development, technology and enterprise
4. Gender, Environmental resource management

全パネルが二日間、同時並行で進行し、最終日の最後は各パネルの報告と全体での議論、総括が設けられていた。そのうち、私が主に参加したのはパネル3である。1980年代後半以降における都市下層コミュニティ(バンコク)の住民の職業変化とライフコースに関する報告をした。パネル3は「社会政策と保障問題」「グローバルな構築とローカルなアイデンティティ」「経済の再編成と女性労働の再定義」「女性の組織化」という4つのセッションによって構成されていた。グローバル化が提起する問題群とセーフティネットなどに関して大きく捉えた後、概念的な報告、ミクロな実態に関する報告、そして再び対抗手段としての女性の組織化の具体的な話へとつな

がり、建設的な議論を喚起する構成であった。

会議に参加して強く感じた印象・感想・意義は主に3つである。第一に、大きく注目されていながらも、個別の議論を統合するのが難しいグローバル化とジェンダーの議論を、実態、政策、理論、また、ミクロとマクロ、様々なレベルから検討し、議論を架橋しようとする試みは評価すべきであろう。また個人的には、各国の参加者の最先端の変化を捉えた報告も興味深かった。インドのコールセンターで働く女性(アメリカやイギリスの企業が顧客)、ボーダートレードを零細行商のレベルで自由に使いこなす国境近くの女性行商人たち。グローバルな再編成は様々な形で露呈する。その影響の現れ方も一様ではない。これらの事例報告は、今現場で起こっている変化の一つの事例として意義のあるものであっただろう。

第二には、国際会議参加の意義についてである。私自身、タイについて研究していると、国内外の研究者との交流は非常に重要となる。私が取り組むインフォーマル・エコノミーというテーマは、日本でも開発経済学の流れでは研究の蓄積がある。しかし、一步海外にでると、同種のテーマに取り組む研究者の幅がどっと広がるのである。今回も、報告後、たくさんの方から声をかけて頂き、また博士論文を準備中であることを知った先生方は、欧米で近年発刊された近接分野の文献をたくさん紹介してくれた。その中には、強く感銘を受けた研究もあり、後日イギリスのサセックス大学の研究者や院生との交流につながっていった。

第三には、会議の雰囲気である。興味深い報告を聞くとワクワクするし、楽しみでもあるのだが、それでも元来、学会自体の雰囲気はどちらかというと苦手だった。しかし、この会議は非常に風通しが良く、気軽に議論がしやすく、余分なところに緊張感を持つようなこともなかった。元々ジェンダーをテーマにしているため、圧倒的に女性参加者が多いこともあるだろう。服装も日本の学会では、「グレー」「紺」のイメージである。したがって、私もついついグレーやブラックのスーツなどを選んでしまう。しかし、ほとんどの参加者がラフな服装で、初日、グレーのスーツを着込んでいた私は浮いてしまった。ラフな気軽さは、服装だけではなく、挨拶以前に軽

く議論が始まるような、そんなリラックスした雰囲気だった。

自身の報告には多くの課題も与えられたが、それを発展させるためのヒントもたくさん得る機会となった。また各国、各分野の研究者とのネットワークが広がったことも大きな収

穫である。私が従事する分野にはこれがかかせない。先輩研究者方はもちろんであるが、同年代の研究仲間を得たことも大きいように思う。

(日本学術振興協会特別研究員/
京都大学東南アジア研究所)

<学会参加記Ⅱ>

国際学会・ワークショップへの参加のすすめ 久野秀二

最近では国際学会への参加や論文発表に果敢に挑戦する大学院生も増えつつあるが、私が初めて国際学会に参加したのは北大助手になって3年目、1998年の国際社会学会モントリオール大会である。プレゼンテーションはRaymond A. Jussaume氏との共著論文を分担報告した2000年の国際農村社会学会リオデジャネイロ大会が最初で、フルペーパーになると、北大農学部と協定締結の途上にあったピソーザ大学をリオ大会終了後に「公式」訪問した際にやらされたミニ講演、ならびに翌2001年にソウルで開催された北大・ソウル大合同シンポジウムでの発表に限られていた。その後、2002年7月から04年9月まで、オランダ・ワーヘニンゲン大学に客員研究員として赴任することになったが、この2年あまりの間、数多くの国際学会・国際会議・ワークショップに参加する機会を得た。以下、そのいくつかを紹介したい。

論文を発表したものとして印象に残っているのは、①渡蘭して数日後、指導していたブラジル人留学生 Simone と臨んだ欧州ラテンアメリカ学会（アムステルダム）である。無謀な日程を組んだのも、研究パートナーの Kees Jansen がコーディネートしたセッションでの報告を要請されたからであるが、同学会に参加していた所属研究室 TAO の PhD 学生（博士課程院生に相当）Lucian と Simone との出会いを結果的に演出することになったのは大きな成果（？）か。もう一つは、②04年4月、OECD のバイオテクノロジー政策に関する論文を発表した TAO 主催の連続公開セミナーである。同セミナーの企画にも関わっていたため、もっとも達成感のある仕事だった。

たんなる聴衆としてではなく、積極的参加

を求められたワークショップないしセミナーとしては、③欧州行政研究所（EIPA）が主催し、OECD が後援した欧州 GMO 政策に関するワークショップ（03年7月、マーストリヒト）；④欧州委員会の助成を受けて欧州の研究者グループが組織した教育プログラム「バイオテクノロジー倫理」ワークショップ（04年3月、イタリア・ジェノヴァ）；⑤研究パートナーでもある TAO の Guido Ruivenkamp がコーディネートした国際農業センターの教育プログラム（2004年5/6月、ワーヘニンゲン）、などが挙げられる。③には20ヵ国50名以上が参加し、バイテク研究者、政策担当者、弁護士、企業関係者、社会学者、農業団体・消費者団体など幅広い専門分野の参加者が活発な議論を通じて、リスク・アナリシスの現状と課題について認識を深めた。このワークショップでの報告と議論の内容は、OECD 刊行物としてまとめられている。討論のセクションには、事後的に提出した私の意見も掲載されている。④では、生命科学や生命倫理、法律、社会学などの分野で著名な研究者がファカルティ・メンバーとして組織する講義やグループないし全体討論に、関連諸分野を専門とする大学院生・若手研究者25名が学生として参加。バイオテクノロジーの教育・研究活動に倫理的・社会的・政策的側面を取り入れることの重要性・必要性を確認することを目指した実験的な取り組みで、国籍や専門分野を異にする若手研究者の交流はとても刺激的だった。そこで培った交友と研究者ネットワークは今後の重要な糧になると思われる。これは⑤にも言えることだが、④とは異なって、発展途上国（ケニア、タンザニア、エチオピア、ナイジェリア、インド）から参加した若手研究者との学際的な交流は、別な意味で興味深いものだった。ティータイムや晚餐会、エクスカージョンを通じて構築される人的ネットワークは、国際学会・ワークショップに参加することの最大の獲得目標である。業績リスト